

范金民氏の研究の紹介

— 中国明清時代の都市化の構造を中心として —

井 上 徹

范金民氏は江蘇省無錫の人(生年は1955年)で、南京大学卒業後、大学院を経て、同大学の講師として任用されたのち、1998年、副教授から教授に昇進し、現在は博士生導師として学生、院生を指導されている。氏の専門分野は中国明清時代の歴史であり、とりわけ江南地方(長江下流デルタ地帯)を対象として多くの研究業績を上げてこられた。国内外における氏の研究業績に対する評価は高く、国内の学会の要職をつとめるとともに、京都大学、ハーバード大学、ミネソタ大学などの研究機関に客員教授として招聘された経歴をもつ。

本年3月、文部科学省「21世紀COEプログラム」の研究拠点「都市文化創造のための人文科学的研究」(大阪市立大学大学院文学研究科)の中に設けられた三つの研究教育チームのうち、「A:比較都市文化史研究」チームの招聘研究者として范金民氏が本学に来訪されることになった。本学滞在期間(2003年3月15日-31日)においては、Aチームの要請にもとづき、明清時代における江南の都市文化をテーマとして、講演及び共同研究活動を行う予定である。小論は、范氏の来日に先立って、氏の研究を紹介することを目的とするが、限られた紙数のなかで氏の多数の研究業績を包括的に紹介することは難しいので、都市文化創造の前提となる都市化に関わる氏の研究を紹介するにとどめたい。なお、都市化に関わる氏の研究は大著『明清江南商業的發展』(南京大学出版社、1998年)に集大成されているので、紹介に際しては、主に本書に依拠したい。

都市化とは何か。宋代を中心として、中国の都市に関する包括的で理論的な分析の作業を進めてこられた斯波義信氏の定義を参照してみよう。都市化とは、農業的な景観のなかから都市集落が成長してゆく経過をさす。つまり欧米の文献にいうurbanizationであり、商業化してゆく社会における都市の発展のことである¹⁾。中国において、こうした都市化の画期は唐宋変革期に求められる。すなわち、中国が都市をもつようになったのは4000年前に遡り(夏王朝後期)、この古い都市は「邑」と総称された。「邑」とはもともと「城郭をもつ集落」(城郭集落)を指し、以来、中国では、「邑」に起源する城郭都市(「城」)を都市に等置するベーシックな中国流な定義が続いてきた。唐代半ば以降、城郭をもつ行政都市で行われていた政府管理下の商業活動が都市から外へと広がり、交通路や農村を巻き込むような規模のものへと形態を広げるプロセスにおいて、行政都市が経済都市の側面を併せ持つとともに、商業化・都市化の状況のなかから、「城」に対置される「郷」のなかに市鎮という商業町が生成された。この市鎮こそが宋から明清に至る時代の都市化を最も際立たせる存在である²⁾。

この都市化の定義を採用するならば、范氏が主要な研究ジャンルとする明清時代の江南は、都市化が最も広く最も深く進行した地域であることに気づかれる。具体的に見てみよう。都市化の進捗に基底で影響を及ぼすのは商品生産と流通の度合いである。明清時代の江南における市場販出を目的とした商業性農業の典型は棉花

栽培、養蚕・桑栽培である。棉花栽培は長江下流デルタ平野の東北部（松江・太倉・蘇州の諸府）、養蚕と桑の栽培は、デルタ平野の西部に位置する太湖周辺から、杭州、嘉興、湖州の平原にかけての地域に集中した。また、席草（むしろに織る原料の草）・藍・煙草・茶・果物なども、農家経営のなかの小商品生産部分として大きな比重を占めた。商品作物栽培は穀物生産よりも多大な利益をもたらしたため、水田から畑地への転換が進んだ結果、江南は天下の穀倉としての地位を長江中上流域に譲った。こうした商業性農業と連動して未曾有の盛況を呈したのは手工業生産である。棉紡織は北方から移入される棉花も原料としつつ、松江府諸県を中心として棉花栽培地域よりも広い範囲で行われ、生糸はほぼ養蚕・桑栽培地域内で生産された。絹織物の製造は広域的であり、高級なものは大都市（蘇州、杭州、南京など）で、また中下級絹織物は湖州、嘉興の府城、及び專業市鎮で生産された。明清時代の江南は、この他にも多様で高度な商品を多く製造することにより、手工業品生産の全国的な中心基地としての地位を確立した³⁾。

商品生産への傾斜は流通構造に大きな影響を与えた。江南の区域内においては、例えば、食糧生産地域と棉布・絹織物生産地域との間に米と衣料の相互需給関係が成立し、棉布・絹織物の生産地域内部では、原料生産と商品加工との間の分業関係により、棉花、棉布、桑の葉、生糸、絹織物の間に頻繁な流通が生まれた。また、全国的な商品流通では、大運河（杭州—北京）、長江という二つの基幹水運を利用して、北方では華北、西方では長江中上流域と江南が結ばれ、また浙東を経て福建へ通じる商業路も活性化し、更に長江中流から梅嶺を越えて広州に至る商業路を通じて、両広（広東・広西）の市場との連結がなされた他、海上の沿岸交易も清代中期以降に重要性を増した。これらの商業路を用いた江南と各区域との間の商品流通の基本は、手工業製品（生糸・絹織物・棉布など）を移出して原材料（食糧・竹木・豆粕・海産物など）を移入するという関係であり、江南を基軸とした全国的な分業体制が成立していたといえる。更に重要なのは、海外貿易である。16世紀以降、日本との間の私貿易、ポルトガル人、オランダ

人、スペイン人による中継貿易（それぞれマカオ、台湾、マニラを拠点とする）を通じて、中国から江南産の生糸・絹織物が販出され、その代価として日本銀、新大陸の銀が大量に中国に流入した⁴⁾。

范氏は、如上の商品生産と流通の発展をバックグラウンドとして、江南内部に階層的な「市場」の構造が出来上がったと考えているが、これは「中心地」という考え方を踏まえたものである。斯波義信氏は、首都から府州をへて県に至るまでの「城」（城郭都市）が「都市」であり、市鎮はどんなに発展しようとも、あくまで「郷」（郷村）であって、従って「都市」になれないという中国の伝統的な都市観念のバイアスから免れるために、人類学者のG.W.スキナー氏の都市論⁵⁾を採用し、「中心地」（central place）という概念を用いて、都市を理解しようとした⁶⁾。中心地とはその後背地に対して「卸売・小売関係で中枢の機能を果たす集落」のことであり、これを基準として都市の階層を、中心首府、地域首府から最底辺の標準市場町まで八段階に分けた⁷⁾。例えば、先進地の大きな鎮は八段階のうちの中級都市に、また中小の市鎮は下級の都市（中心市場町、中間市場町、標準市場町）に、格付けされた⁸⁾。范氏のいう「市場」も、この「中心地」の考え方に共通するが、江南の都市をランク付けするに際しては、農村小市場（小市鎮初級市場）、地方專業市場、区域中心市場、全国中心市場、この四つに分類した。農村小市場は人口規模が1,000戸以下で、基本的な商業施設が整っている小市鎮を中心とし、市場体系が農村に浸透する終点であり、また農村経済が市場に連結される起点として位置づけられる。地方專業市場は人口規模が1,000戸以上から10,000戸前後までで、專業性商品（生糸・絹織物、棉布など）の取引の仲介地点であるとともに、区域中心市場、全国中心市場とも連結していた。行政都市としての府県城も、その商業規模が区域中心市場より小さい場合には、この分類に入る。地方專業市場の上位に位置する区域中心市場は工商業人口が集中し、周辺に大小の市場を形成する区域の中心であり、例えば、杭州、南京、鎮江、及び清代中後期の上海、無錫が該当する。全国中心市場は蘇州である。蘇州

は江南の区域中心市場以下の各級市場を一つに結ぶ役割を果たすとともに、全国各区域市場との緊密な連携を保持し、江南の市場網のなかで中心的位置を占めた⁹⁾。

以上に紹介してきた范氏の市場論を、宋代以来の都市化の状況に照合するならば、この間にどのような事態が進行したといえるのであろうか。市場（中心地）のハイアラーキーの原体系はすでに宋代において成立していたが、范氏が提示した市場分析は、蘇州という工商業都市を全国中心市場として、南北、東西に広がる巨大な空間のなかで成立する市場のネットワークがこの時代には確かに密接に連結されるようになっていたこととともに、宋代を起点とする都市化が明清時代とくに明代後期以降の江南で急速に、密度を濃くしながら社会全体に浸透したことを示唆するように思われる。つまり、少なくとも16世紀以降の江南の人々にとって、どんなに辺鄙な山間の農村に住んでいても、農村小市場から区域中心市場、更に全国中心市場へとつながる市場ネットワークとは無縁でいられないような時代が到来したといえるのではないだろうか、范氏の研究はこうした感想を読み手の側に抱かせる。

都市文化というテーマを中国という巨大な空間のなかで考察しようとする時、范氏が明らかにした商業化・都市化の構造はその基礎となるであろう。つまり、商業化・都市化の潮流が江南と全国を連結させるような形で展開した時、中心的位置を占める江南の都市ではどのような文化が形成されたのかという問題の立て方ができるように思う。3月に予定されている范氏の講演と研究会において、この問題が集中的に議論されることになると期待しているが、最後に一点のみ言及しておきたい。斯波義信氏は、明清中国が市鎮の叢生という現実にもかかわらず、「城」と「郷」という二分法に固執したのはなぜか、という問題を提起し、この問題を解決する重要な要素として、「儒化」＝「儒教化」に着目する。帝国の儒教イデオロギーとその制度的な装置が浸透し、かつ洗練されていくとともに、地方社会では儒教知識人（郷紳）が社会のリーダーとして認知される体制がととのっていくというように、建前としての「儒化」に傾い

ていく社会にあって、「城」は防備によって人民を保護する施設であるにとどまらず、儒教文化や科挙文化というてこでもって社会をまとめ、統制していく砦という色彩をますますはつきりさせた。つまりは、儒教を柱とする帝国理念においても、「城」という概念を政治・文化面で維持し、あるいはむしろ強化してきたという背景がある¹⁰⁾。こうした儒教化の一つの象徴は、儒教倫理と教育を重んじた宗族である。社会的流動性が加速した16世紀以降の都市において、宗族は、知識人や商人が科挙官僚制度に人材を送り出し、また激しい商業競争を乗り切るのに適合的な集団としてその威力を飛躍的に増した。例えば蘇州城内には、宋代以来、宗族の模範とされる范氏の宗族施設（義荘）が設けられていたが、この時期、范氏の義荘を模倣する動きが蘇州城周辺のみならず、県城、市鎮へと拡張していった¹¹⁾。他方、農村よりも人口の密集度も多様さも高い都市では、官僚文化がすべてを牛耳っていたわけではなく、日常的・大衆的な都市文化というものは、むしろ道教、仏教の世界のなかで勢いを増していた¹²⁾。儒教化の形勢と宗教勢力の隆盛のなかで江南にはどのような都市文化が生み出されたのか、そして江南の都市文化は他区域の都市文化の生成にいかなる影響を及ぼしたのか、こうした課題の検討が必要となるであろう。

（2003年2月3日記）

注

1. 斯波義信『中国都市史』東京大学出版会、2002年、「はじめに」。
2. 斯波前掲書第一章。
3. 范金民『明清江南商業的發展』南京大学出版社、1998年、第二章。
4. 范前掲書第二章。
5. G.William Skinner, ed., *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1977.
6. 斯波前掲書 44-54 頁。
7. 斯波前掲書 99-100 頁。
8. 斯波前掲書 100-101 頁。
9. 范前掲書第三章。

10. 斯波前掲書 297-302 頁。
11. 拙著『中国の宗族と国家の礼制』研文出版,
2000年。
12. 斯波前掲書 299 頁。